日本クリスチャン・アシュラム連盟

イエスは主なり

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈祷運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕　131号

『聖霊と愛の交わり』

土山牧羔

「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」（ローマ人への手紙５：５）

クリスチャンとは、神に愛され、それゆえに神を愛し、神に望みを託して生きる新人類です。十字架の上で私達に代わり、罪人の姿になって生命を捨てたイエスの贖罪の愛によって、現実に神に愛されていることを実体験として強く実感させるのは、聖霊です。私たちのキリストへの愛が薄れ、キリストとの関係が生命を失って腐れ縁のように固定化し、名目だけの信仰になるとき、再び祈りと信仰により聖霊に満たされ、主の愛への感動を新たにされ、主を愛する愛をさらに強くされましょう。

1967年にスタンレー・ジョーンズ博士が83歳で来日されたとき、全体主義国家の霊的状況を分析されました。国家は虚理を強要する教会になり、元首は絶対の権威者に、国民は自由の無い服従を強制され、国に生命を捧げて名誉の不滅を約束された。この国家主義的霊性は、神が創造において人間に与えられた本性である「神の創造と救いの恩愛に報いる忠誓心」であったが、教会が霊的力を失うにおよんで、その空虚は政治的悪霊の住処と化したとの意味を述べられました。

ここで今、キリストが一番求めていられることに従がう決心が迫られています。主の求めは魂を追求し、互いに愛し合うことです。キリストの愛に根ざした愛の交わりが、信仰者相互の間に結ばれて、新しい愛の関係である神の恵みによる信仰者の共同体ができます。それは主にあって愛し合った良い関係にある信者たちの信仰的交わりです。

聖霊による愛は霊的に変革する強い力を持っていて、愛は愛を呼び起します。例えば、高校を出て会社に就職した娘が大学の若い先生に愛され求婚されたとき、彼の妻として相応しくなりたいと願い、夜間大学に入学したのと似ています。イエスの愛は、主の愛に答える私たちを新しい奉仕へと駆り立てます。「というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。」（コリントⅡ,５：14）私たちにすべてを与え尽くしたキリストの贖罪の愛に強く感激し、主への愛で心を燃やし続けて生き抜きましょう。主の愛に応答して自分自身を主の御手に明け渡し、自分の愛を神に捧げて伝道と愛の奉仕に励む献身の生涯を全うしましょう。

（日キ教団泉北ニュータウン教会教師）

霊想②

「わたしの恵みは　あなたに十分」
Ⅱコリント12の9

香櫨園教会牧師　古河　治

教会に来ているのは自分一人である。家族が沢山おるけれども、教会には自分ひとりだけである。そういうことのために祈ってほしいと。そういうことを思います時に、よそ事ではないうちの教会もその通りやそう思って、今も此処に立たせて頂いています。

神様の前に「虚偽のない信仰」と同時にそれはお互いの実生活において「虚偽がない信仰」でなければなりません。教会ではええ事ゆうても、一旦家に帰って服脱いでくつろいだら、別の人間やと、まあ教会では色々と忙しく奉仕してですね、社会的なそういう事にも率先してやって、あの方は立派な方やなあ、家に帰って其の通りであるかということですね。子供は見てますよ、表向きのそういう姿でなしに、私生活を見ているのです。わたしはここに家族伝道への厳しさを感じました。

私は教会で救われたのではない。子供の時から教会に連れられて、自分で祈ったということもなかったのです。わたしは七人兄弟の一番下七番目です。母はわたしが可なり大きくなるまで、ねんねこで負ぶっていて、子守唄は「大君イエスは……ほめた称え奉る其の声々は、海にも山にも響き渡りぬ、ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ、アーメン」明治時代の讃美歌にある歌を歌い続けていました。

この母はほんとうに祈りの人でした。そういう姿をわたしは見ているのです。人に聞かせるお祈りは一つもありませんでしたが、それをわたしは母の背中から肌で感じ取ったわけです。母は、八十二歳で天に召されました。最初持っていた信仰のルーツからの大事な聖書は大阪の大空襲で焼けてないしね、それから鳥取行ってから求めた聖書、讃美歌それも一九五二年の大火で焼けてないですから、そこにあるのは芦屋に来てから買い求めた聖書ですからあたらしいのです。あるときその聖書をぱらぱらと開いてみました。これがその母が持っておった紙です。そこにみ言葉が書いてありました。使徒行伝二十・三十五「与うるは、受くるよりも、幸いなり」とあります。ああ、母はそういう人やったなあ、こういう言葉の通り、ほんとにそういう人やったなと思いました。その後赤いペンでかかれた文字に気づきました。それは旧約聖書箴言の十六章の三でした。わたしはこのみ言葉を母が死んで二十数年たってから読みました。丁度そのとき私は教会の現状、将来についてどうしたらよいのか、思いに悩んでいたのです。その時、神様は不思議にも母が書いた紙切れの中にみ言葉を母の遺産として、わたしの聖書に挟んでおいて下さったのです。わたくしが最も必要とする時を神様は見てお出でになっていたのでした。

その翌年の一月の十五、十六日、恒例の関西訪問伝道研修会というのが関西学院大学三田市のセミナーハウスでありました。閉会後講師の吉井先生をJRの三田駅までお送りしました。わたしはいつも宝塚から山の中にずーとゴルフ場などがあります山道を通っていました。その日に限って国道を通りました。そうしたら大渋滞で宝塚まで二十分で行くところを四時間かかりました。自宅の香櫨園教会まで五時間かかりました。

翌朝は例年通り早天祈祷会があります。いつもの通り五時三十五分に目覚ましが鳴り、さっと起きようとしましたけれど起きれないんです。〝ズドーン〟と音がして大地震が起こりました。揺れがおさまり、恐る恐るベッドから降りてドアーを開けようとしましたが部屋の荷物が落ちて山のようになり開かないのです。教会全体を見て回りました。教会の台所はガラス、陶器類が棚から落ちて全部壊れていました。祈祷室へ行ってみました。可燃物の山の中に点火してあるはずのストーブがありました。わたしはそれを見た時に、もしあの時に、吉井先生を乗せず、十数秒の違いでわたしが先に裏道を帰えとったら、或いは先生がわたしが帰るまでにタクシーが来て帰られたら、もしあの時吉井先生を乗せなかったらどうなっていたか。忽ちもう下から燃え上がり、階段の上のわたしの部屋は炎の筒のなかにあり、私ども夫婦は生きたまま火葬になっていました。「お前の命はわたしのての中にあるんだぞ」其のことを地震のこの時にいやっと言うほど知りました。わたしはほんとにその時に、助けられた喜びよりも、わたしのすべて、今の命も何もかも「神様のみ手の中にあってのことや」とこれが地震の時の、ほんとにわたしの思いしらされたことであります。十日後に救援に来た青年の働きで大阪の救援センターがようやく香櫨園教会への救援の活動が始まったわけであります。程なく老紳士一行が救援に来ました。老紳士の名刺に中目黒教会

武間健太郎と書いてありました。この武間先生がその青年たちの報告を聞いて、救援に来てくれたわけです。その後、武間先生夫婦がお弁当を持って来て下さいました。武間先生が「被災した牧師から聖餐式を受けたい、ぶどう酒とパンを持ってきています。」しかしながら聖餐式言われましてもね、ガウンもね、瓦礫の中で出てこないしね、式文も瓦礫の中で出てこないですよ。そんな……状態で……聖餐式できませんですよ、みなさん。しかししどろもどろの内に聖餐式をしました。

先生が帰った後、そこでふとふりかえっていましたら、そこにイエス様が立たれ、じっと私を見つめ、わたしのこころに、みみに小さい声でありますけれども明確に「この教会の復興はわたしがするのだ。」そのとき初めてこの異常なこの聖餐式の司式者はわたしではなかったなあ、ご臨在の主イエス様が、ここにお立ちになってこの聖餐式をなさったなあと、そのとたんに私は喜びでもう満ち溢れたです。「この教会の復興はわたしがするんだ。」と、わたしはイエス様にすべてをお委ね致しました。

わたしは神様のなさることの不思議さを思います。決してわたしども一人一人今ここに自分の力、自分の知恵、判断でここにあるんでないですよ。みんな神様のみ手の中にあって許されて有らしめて頂いているのです。

第36回関西アシュラム報告

小林　勝

関西アシュラムも回を重ねて三十六回になりました。今年は、十月十三日（日）～十四日（月・祝）の両日に、例年の会場である西大津の国際交流セミナーハウス皇子ヶ丘荘で開かれました。今年は本部書記の木部安来先生をお迎えして、新しく参加された方々も加えて、三十四名の集会となりました。会場は毎年関西アシュラムが全館お借りしており、恵まれた環境にあります。今回から京都復興教会に岡本浩志先生ご夫妻が赴任され、清水先生のご指導のもと事務局のご奉仕を積極的になさってくださいました。スムーズに集会準備がなされました事を感謝申し上げます。

「開会の祈」を清水潔先生、「開心の時」を土山牧羔先生、「福音の時」を辻中昭一先生、「朝の祈」を杉田常夫先生、「静聴と分かち合い」を古河静子先生、「労作の時」を佐野昌弘先生、「充満の時」を金武士先生がそれぞれ担当してくださいました。奏楽者は岡本先生夫人貴子姉がご奉仕してくださいました。連鎖祈祷は例年のように戸波淳兄が担当くださって二日間の充実したアシュラム集会を終えることが出来ました。

今回は、委員会にて木部先生からアメリカ国際本部の都合で二〇〇四年の日本での国際アシュラムを開くことが出来なくなった事情の詳しい説明があり、色々のご苦労をかけた関西アシュラム委員の方々の前で、深々と頭を下げられた姿が印象に残りました。本部の先生方も十分ご考察なさった上での決定ですので委員全員先生の誠意ある説明に納得いたしました。

今回の集会では期せずして関西アシュラム創立時の証が幾つかあり、創立時の有力なメンバーが今なお関西アシュラムの中心的な働き人としてご奉仕できる恵みを深く覚えて感謝です。同時に次世代の働き人養成の必要性を痛感しており、その為の壮年層の委員補充などを委員会の議題にのぼらせることなどが話し合われました。二〇〇四年の日本の国際アシュラム中止が決定した中で、それに代わる日本アシュラムが関東地区主催で開かれることが本部で計画されていると聞いております。それに向かって準備される方々を覚えて、祈りを共にしたいと願っております。

機関紙発行が定期的になされることを願いつつ次世代に向けての日本クリスチャン・アシュラム連盟の働きが十分になされますように関西支部一同祈っております。

《消　息》

●柳沢　清兄（関東アシュラム委員）
'02年10月22日臓器癌のため、召天され、日本基督教団更生教会にて葬儀が執行されました。

●棚田恵子姉（前関東アシュラム委員）
'02年11月召天されました。

●桧貝幸子姉（関東アシュラム最年長者百歳）
'02年11月勝利の内に召天されました。いずれもご遺族の上に主の御慰めを祈ります。

第37回九州アシュラム報告

岡山　敦彦

第三十七回九州アシュラムは、昨年十一月三日～四日、主題「イエスの焼き印を身に受けて」の主題のもと、今年も福岡県宗像市にあるカトリック黙想の家で行われました。参加者は三十名で、とても恵まれた集会となりました。

今回は、富山アシュラムから本多英一郎先生を助言者としお迎えし、二回の「福音の時」でお勧めをいただきました。

例年出席される方々の人数が気になりますが、例年よりも多くまた初めての参加者も数名与えられたことは感謝でした。例年一泊二日の集会で、社会人の人たちが参加しにくい事もあり、今回は日曜日の午後四時から四日の祝日の午後四時までの集会としました。少し時間が短く、「福音の時」も例年三回の集会が二回になったりしましたが、中味の濃い集会となり、多くの参加者が与えられ感謝でした。

「福音の時」では、講師の本多先生が、ご自分の救いの証しから始めて、次々と家族・親戚の方々が主の救いに入れたらことを話され、参加者にとっても大きな励ましとなりました。

主によって自分自身に消えることのない焼き印を押されている者は、決して見放されることはなく、かえって豊かな祝福をいただくことを学ばさせていただきました。

アシュラムの素晴らしい恵みは何と言っても「連鎖祈祷」の時であります。午後九時から翌朝の五時三十分まで、祈りの輪が途切れることなく続けられます。普段なかなか集中して祈ることの少ない者たちにとって、みことばを読み、祈りに集中して主のみこころを求めることができます。一応、ひとり一時間と決めてありますが、ある方はその時間が主との素晴らしい交わりの時間であるがゆえに、時の経つのを忘れ、二時間も祈祷の時間を持ったと言われていました。また九州アシュラムには、毎年毎年積み重ねられている祈祷ノートがあります。参加した方の祈りの課題が記されています。またそれを読まれた方が、とりなしの祈りをしてくださいます。また感謝の祈りも記されています。共に喜ぶことができるのはクリスチャンの特権でもあります。この「祈祷ノート」は九州アシュラムの財産です。

第三十四回城北アシュラム案内

と　き・'03年2月11日（火）午前10時より午後4時45分

ところ・日本キーリネス教団池の上キリスト教会

三鷹市井口三―十五―六

TEL〇四二二―三三―〇〇一八、FAX〇四二二―三三―〇〇六一

主　題・「愛のうちに育てられ」（エフェソ四の十六）

はれるやさん

谷牧子

東京都目黒区中央町1の21の10
碑文谷教会気付
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座　東京〇一〇〇―一―四五五八
理事長　大石嗣郎
編集人　横山義孝
定　価　一部60円　〒80円